

夏目漱石

好悪と優劣

好悪と優劣

上

作物さくぶつの評価ひやうに好悪の弁を用いるかぎり、作物そのものは是非の煩わづらいから脱却している。という意味は、好悪とはついに評家の頭にのみ存する印象で、いわば作物から反射した光線の影が、彼の胸に宿った主観的の感じにすぎないからである。これに反して、もし翫賞がんしょうのうえに優劣の文字を使用すると、まえとは趣がだいぶ違つてく

る。すでに優劣という以上は、評家の受取^{うけと}った個人的の感じに満足しないで、その感じを自己以外の読者にも通用するものと見倣^{みな}すか、または通用せしめんとする一種の努力である。他の方面から説明すると、優劣という言葉は、すでに評家の頭を離れて作そのものに付着した區別である。優劣の二字で批判された作物は、その批評を自家の属性のごとくに背負って歩かなければならない。客観的にそういう資格を評家から付与されたといつてもよし、もっと鮮明に述べると、在来客観的に作中に存在していたそういう資格を、評家によって今発見されたと

いうことにもなる。

だからたゞ自分は甲の作が乙の作より好きだとか嫌きらいだとかいっているうちは、評家として作物に対する責任ははなはだ軽いのである。すなわちその裏面には、常人は異見もあろうが自分はこう思うという条件が付帯してある。謙遜の美德に富んだ人、もしくは作家に敬意を表する人が、好んでこの態度に出るのは、このためである（今の評壇にこの種の人にははなはだ少すくない）。

これに反して優劣を断言する人は、自分の評価は単に自分にのみ正当なのではない、他の人にもぜひ通用しな

ければならないという仮定から出立している。いわば権威ある批評である。甲は乙よりも優っているあるいは劣っているとは、すなわち評者一家の好悪ではない、作そのものがすでに優っている、劣っているという意味なのだから、天下一般に通用しなくてはならないすこぶる強いもので、ほとんど他に反対を許さぬ性質を帯びている。したがってその責任ははなはだ重くなければならない。ぜひとも客観的に論証して、この作はこういう長所特色、もしくは、こういう短所陥欠があるから、優っている、もしくは劣っていると、自分の頭に受けた好悪を、さら

に作そのもののうえに放射して、誰にでも見える作中の
 事相もとに本づいて、それを材料として絮説じよせつしなければなら
 ない。しかもいうところはコンヴェインシングでなければ
 ならない、しからざればすでに自家出立当時の仮定を、
 蔑べつじよ如せる矛盾に陥るからである（今の評家の多くが、態
 度からいうと作物の優劣を諭くりかえずるごとくに見せて、その
 実は単に好悪の評を繰返すのは、たゞに作家を侮辱する
 のみならず、かねて天下を瞞まんちやく着せんとするものである）。
 優劣の論議は一個の好悪を拡大して、これをできるだ
 け普遍的ならしめんとするの努力である。自己の好悪を

直下じきげに他に感染せしむるの方法なきゆえに、已やむを得ずひとまずこれを客観的に翻訳して、それを納得する他人に、自己同様の好悪を把捉はそくせしむる方便である。二重に手間のかゝる回りくどい方法ではあるが、翫賞くわんしょうのうえにおいては各翫賞家の間に以心伝心の法を欠く人間の所作しよさとして、手ぬるくとも仕方がないのである。

下

この間接手段（自分の主観を一返客観いっぺんに翻訳して、そ

の翻訳の力で、またもとの主観に似たあるものを人の頭に起させる手段）において、自他の感情に交通の途みちをつける中間の連鎖が至要の使命を帯びるのは当然である。比喩ひゆてき的にいえば、この導線はわが電流を彼に送るに湛えるほど丈夫じやうぶでなければならぬ、またデリケートでなければならぬ。平たく説破すれば、両者の中間に横たわる客観的絮説じよせつは有力で明瞭めいりやうで秩序があつて、聞く人に納得のできるようなものでなければならぬ。すなわち普遍的の傾向を有する点において相当の実力を具そなえていなければならぬ。

けれども吾人ごじんが作物の優劣を論ずるとき、自家の好悪を拡大してさらにこれを他人の好悪となさんと試みるとき、その試みの成敗は一にかゝつてこの中間の絮説にあるがごとく考えるのは、それが唯一の方便だからである。よくよく自分の心理状態を反省してみると、自分の本気に重きを置いているところのものは、依然いぜんとしてやはり当初の主観すなわち好悪にある。この好悪の念があざやかに限くまどられて、強烈に燃焼するとき、これを伝うる導体また必ず有力であり、コンヴェインシングであらねばならぬとの感が潜ひそんでいる。主観を翻訳する客観的絮説の

価値こそかえって懸かゝつてこの主観の強弱にあるかの信念がある。好悪の取捨赫灼かくしやくとして目を射るごとく明かなるときはこれを布衍ふえんする第二義の説明も、またそれに相応する権威をもつて上下に徹底し得ざるべからずとの自信に支配される。すなわち直覚が強ければ強いほどそれを代表する議論も堅牢けんろうであるとの念が深い。だから客観の弁説が作の優劣を決するとはいいながら、その実はすでに一個の好悪が早くすでにその優劣を決しているのである。好悪が優劣に変化せねばやまぬほど（自己が多数に伝染せねばやまぬほど）、主観が強ければこそ、客観

的の導線も自然に流出するのである。

個人の主観が個人的の制限に甘んぜずして、これを普通ならしめんと活動を試みるのは、取も直さず、趣味に統一がなくてはならぬとの努力に外ほかならぬのである。自分の好悪は同時に甲の好悪であり、乙の好悪であり、並あわせて丙丁の好悪であり得べし。もしくははしかあらざるべからずとの念力ねんりきであつて、この念力を果す方法がすなわち誰にでも通用する客観的論弁の形になつて発現するのである。

「鑑賞の統一と独立」中に述べた統一と独立との関係は、

実をいうところいうものであったのである。したがってこの統一という字面じづらの裏には、必ずしも俗にいわゆる芸術上のカノン（法規）を含んでいない。芸術上のカノンはギリシアのアリストートル以後幾多の哲学者と批評家によって建立こんりゆうせられまた破壊された。昔より今日に至るまで、永久不変の価値を有するカノンはいまだかつて一つもないといって差支さしかえない。その理由を説明するのは、先に述べた「イズムの功過」中にある議論を繰返すだけだから、重説しない。ケヤードという学者は、天才はみずから法規を制定するの権利を有すと言っている。

余よの言葉に従えば、自己の生命は自己に適當なる輪郭を自然に構造するがゆえに、一代前の輪郭をいつのまにか脱却するということである。だからこゝに弁じてきた統一と古来から幾度も唱道されたカノンと同様式のものとする、一方に統一を説き一方にイズムを排する、余は明らさまに矛盾を冒おかしたわけになる。だからそこを明かにしておきたい。

余の言つた趣味の統一とは、多様多様の作物の個々○○を翫賞がんしょうする場合に甲乙がその評価において一致すること○を指さして多く言つたのである。いやしくもある程度まで

この統一を許さぬ以上は、文芸界に在^あって同じ空気を吸いながら、同じ飯を食いながら、同じ文明と社会に住みながら、友人と他人とに論なく、人は皆石片のごとくなら精神的に交渉なくたゞごろくしているという不合理な結論に到着しなければならぬ。そうすれば文芸の成立に必要な相互の同情という本義を滅してしまふと言いたいのである。好悪をもって満足のできぬほど主観が強烈に働くとき、これを客観化して優劣とし、そこに趣味の統一を要求してはじめて落ち付くのは単に自我を吹^{ふい}聴^{ちよう}するばかりでない、わが主観に対する同情を天下

に求むる自然の声であると提唱したのである。

(明治四三・七・三一―八・一)

日本文学電子図書館

好悪と優劣

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第8巻」角川書店
昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館